

# 平成31年度編入学試験問題

## 小論文

### (国際地域学科地域教育専攻)

#### 注意事項

- 1 試験開始の合図があるまでは、この問題冊子を開かないこと。
- 2 「問題」は1～3ページです。
- 3 解答用紙は1枚、下書き用紙は1枚あります。
- 4 解答は指定された解答用紙に記入すること。
- 5 受験番号は解答用紙の指定欄に記入すること。
- 6 解答は横書きとし、指定された字数にまとめること。
- 7 解答用紙のみを提出し、問題冊子・下書き用紙は試験終了後、持ち帰ること。なお、いかなる理由があっても解答用紙以外（下書き用紙など）は受理しません。
- 8 試験中に問題紙の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等により交換を必要とする場合は、手を挙げて監督者に知らせること。

**問題** 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

minstrel・ショウとは、19世紀半ばにアメリカで流行した大衆芸能であり、顔を黒塗りにした複数の演者がステージ上で歌や踊り、それに短いコントなどを披露するものである。1843年2月6日にニューヨークで開催されたヴァージニア・ minstrelズの公演をきっかけに爆発的に広まり、翌年にはエチオピアン・セレネイダーズというグループがホワイトハウスに招かれるほど人気は高まった。

(中略)

では、実際の minstrel・ショウはどのようなものだったのだろうか。注意しなければならないのは、白人が顔を黒塗りにする「ブラックフェイス」の伝統——シャンパン用のコルクを焦がして微粉状にし、それに水やワセリンなどを混ぜたものを顔に塗ることで黒人を表象する方法——は19世紀に始まったものではないという点だ。シェイクスピアの『オセロ』はいうまでもなく、以前より役者が顔を黒く塗りアフリカ人を演じる演劇作品は存在したし、ある研究によれば1751年から1843年にアメリカで上演された作品のうち、5千以上のプロダクションがブラックフェイスを取り入れているという。

いずれにしても、18世紀以降ブラックフェイスによって人種的キャラクターを演じる芸能が定着し、それが minstrel・ショウという大衆芸能のフォーマットに取り入れられたとする見方が一般的だろう。その成立の過程で大きな役割を果たしたのが、白人コメディアン、T・D・ライスである。1820年代にニューヨークの劇場でエキストラを務めていた彼は、やがて南部の黒人奴隷の動きを誇張する歌と踊りで人気を博すようになる。「ジム・クロウ」と呼ばれるこの黒人のキャラクター——もともと身体に障害を持つ黒人の動きをまねてこの芸風を編み出したという「神話」についてはさらなる検証が必要だが——は評判を呼び、ライスは1832年にフィラデルフィアやニューヨークなど東部主要都市の公演を成功させ、36年にはリバプールを皮切りにロンドンやパリにも渡っている。

白人が顔を黒く塗り、黒人のステレオタイプを演じる芸風はまたたく間に広まり、キャラクターもさらに細分化する。野蛮で滑稽な南部黒人奴隷を演じる「ジム・クロウ」のほかにも、北部の黒人シヤレ男をキャラクター化した「ジップ・クーン」、さらに無知で暴力的な黒人を描いた「オールド・ダン・タッカー」など、多くのヴァリエーションが生まれる。「黒人の奇妙な動き」を強調すればするほど「黒人らしさ」はきわだち、デフォルメされた描写にオーセンティシティが宿る。それぞれのキャラクターにはテーマ曲があり、ブラックフェイスの芸人は歌や踊りとともに黒人を演じるのだ。

(中略)

白人が顔を黒く塗り、黒人の形態模写をおもしろおかしく演じるという芸風が、とりわけ現代の感

覚からして人種差別を容易に連想させる点は否めないだろう。じっさい、そうした批判はすでに同時代に存在した。19世紀アメリカにおけるもっとも著名な黒人指導者のひとり、フレデリック・ダグラスは自ら創刊した新聞にブラックフェイスの芸人について次のように述べている。

彼らは白人社会の汚れたクズのような存在であり、生まれつき与えられていない皮膚の色を金儲けのために我々から盗み、白人の仲間たちの墮落した趣味に媚びている。

こうした人種差別の構造が、主な観客を構成する白人労働者階級の政治的価値観を反映したものであることは先に述べたとおりだ。都市の労働者階級を基盤とする民主党は奴隷制を支持したが、ミンストレル・ショーでは純粹無垢な奴隷が白人の主人のもとで幸せに暮らす姿など、南部プランテーションの想像上の牧歌的な風景がしばしば描かれている。逆に奴隷制廃止論者は偽善者や臆病者として造形され、人種混淆に積極的な卑劣な人物として演じられることが多い。ハリエット・ピーチャー・ストウが『アンクル・トムの小屋』（1852）を刊行して奴隷制を告発したとき、ミンストレル・ショーでは小説に反対するパフォーマンスが数多く繰り広げられたという。

だが、昨今の研究成果はさらに踏み込んだ知見をもたらしている。ミンストレル・ショーは、そうした白人による黒人差別の構造の前提となる「白人性」が構築される場としてとらえられるというのだ。歴史学者デイヴィッド・ロディガーによれば、さまざまな移民によって構成される白人労働者階級が〈白人〉という同一性＝アイデンティティを獲得するのに、ミンストレル・ショーのブラックフェイスは有効に機能したという。たとえば、カトリック教徒で乱暴者というイメージを持たれていたアイルランド系移民は初期ミンストレル・ショーに数多く出演しているが、彼らは自らの故郷の歌をステージ上で積極的に披露した。また前述したとおり、舞台ではイタリアやフランスのオペラをもとにした歌曲だけでなく、ボヘミア地方のポルカなどもレパートリーに加えられている。アメリカ国内の音楽でも、南部や西部を表象する多様なメロディが流れていた。ロディガーは次のようにいう。「こうした極端な文化的多様性は、同時に民族的、地域的に異なる文化がブラックフェイスへと収斂する過程でもあり、それは最終的には空虚な白人性へと帰結するのである」。

観客は、舞台上で自分たちのことを楽しませるブラックフェイスの芸人が、実は〈黒人〉ではないことを十分承知している。その「黒人ではない」という否定により「白人」という抽象的な概念が浮上り、出身も文化も異なる移民で構成される労働者階級の人々に統一的なアイデンティティを付与するのだ。見せかけの〈黒人〉の背後に否定的に構築される〈白人性〉。ミンストレル・ショーを人種差別が再生産される場としてのみとらえるのではなく、〈人種〉という変数そのものが立ち上がるプロセスとして読み取る視点は、その後のアメリカ音楽文化の展開を考察するうえでも有用である。

（大和田俊之『アメリカ音楽史 ミンストレル・ショー、ブルースからヒップホップまで』講談社(2011)から抜粋）

**設問** 著者は、「昨今の研究成果はさらに踏み込んだ知見をもたらしている」と述べているが、人種差別の構造についての「さらに踏み込んだ知見」について説明し、その知見に対するあなたの考えを 600 字以上 700 字以内で論じなさい。

(100 点)